令和3年度 dec定時総会のお知らせ

令和3年度の定時総会を下記の日程で開催いたします。
開催方法等詳細につきましては、会員の皆さまに後日文書にてご案内申し上げます。

◆日時：令和3年5月31日（月）

「シーニックドライブマップ 2021年度版」発売! 定価200円（税込）

今年のテーマは、地域の景色を満喫できる「シーニックデッキ&おすすめビューポイント」です。その他、地域イチオシの食を楽しむ「おいしい道の駅」や、眺望良し！食べて良し！の「おすすめシーニックなカフェ」、寄り道スポット、ビューポイントと一緒に、シーニックバイウェイ北海道のスタッフがおすすめするドライブコースを紹介します！

「道の駅」マップ付き！ 全道の道の駅で購入できます！

ご協力ください！

スマートフォンアプリで ロードキルデータを収集中！ —実証実験—

実施期間 2021年8/31㈫まで

帯広畜産大学では、動物と車両の事故「ロードキル」のデータ蓄積手法を構築するための調査として、いきものコレクションアプリ「バイオーム」を活用したデータの収集を行ってします。収集データは、交通事故で死んだ動物の画像です。発生場所や動物種を記録していくことでロードキル防止対策へと役立てることを目的としています。ぜひ、ご協力をお願いします！

参加方法

①ダウンロード
iPhone、Androidに対応
無料

②利用登録・設定
新規登録またはログイン後**画面左上アイコン→アプリ設定&通知→投稿の公開範囲（タイムラインに公開）をオフ**にしてください。

③クエスト登録
ロードキルを発見したら、カメラで撮影。AI判定または手動入力で種名を決定。

④撮影と投稿
観察メモに以下を入力
★#ロードキル調査
★AI判定or手動入力
★発見時の天気
★その他、気づいたこと

⑤確認
投稿の公開範囲が**非公開**であることを確認。
「#ロードキル調査」の後ろは空間。文字が**青く**なっているのを確認し、投稿。

調査内容等の詳しくはこちら

Biome（バイオーム）：日本国内のほぼ全種（6万3635種）の動植物を収録した「いきものコレクションアプリ」。生物名前判定AIを備え、図鑑・地図・SNS・クエストなど様々な機能も充実。現実世界がゲームのように楽しめる。

編集後記

4月下旬から国内でのシェアサービスがスタートした電動キックボード。コロナの影響で、公共交通から自転車等に移行していることもあり、「ラスト1マイル」での活用が期待されるそうです。利用にあたっては、公道を走行するので原付免許とヘルメットの着用が必要とのこと。先日、試乗する機会があり、その手軽さにびっくり！遊び感覚で楽しめるので車と横並びで走行するとなるとかなり勇気が入りそうでした（ペーパードライバーだからかな…）。街中でも見かけることがあるので、これから利用者が増えそうですね！（M.K）

試乗するdec伊地知

dec monthly vol.428
2021年5月1日発行
発行人 編集人 山口 登美男
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL http://www.decnet.or.jp/ E-mail dec_info01@decnet.or.jp

News letter since 1985 01 MAY
Hokkaido Development Engineering Center
dec monthly
2021.5.1 vol.428 デックマンスリー

● Monthly Topic（マンスリートピック）
社会資本整備と教育

dec Interview >>> 北海道教育庁後志教育局 局長（現：北海道教育庁学校教育局 指導担当局長） 中澤 美明 氏

地域で当たり前と思われることを調べ直して価値を再認識するのが地域学習の良さ。「北海道」を学ぶことは、「多様性を認め合う」大切さを確認することにつながります。

今、子どもたちは学校で、自分たちが暮らす地域についてどのように学んでいるのでしょうか。「社会に開かれた教育課程」（文科省新学習指導要領）が目指され、GIGAスクール構想が推進されるなかで、子どもたちの地域学習の望ましいかたちとは何か、北海道の教育行政に長く携わり、「ほっかいどう学」にも関心を寄せてこられた中澤美明さんに伺いました。

十勝管内等で12年間小学校教員をされた後、道立教育研究所（江別）や根室、上川、後志の教育局、また、本庁（札幌）の義務教育課に勤務されてきました。

出身は新潟県北部の胎内市で、大学進学で北海道に来て、今に至っています。子どものころから北海道に憧れ、そこで先生になりたい、と思うようになりました。父が北海道好きでよく旅行に出かけていました。私が同行することはなかったのですが、家に旅行パンフレットがたくさんあって、それを見て「北海道はいいなあ」と思ったのですね。

初任地は池田町立池田小学校で、次に占冠、南富良野と赴任し、その後、道立教育研究所に長期派遣され、99年に同研究所に異動しました。現在、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長の新保元康先生に初めてお会いしたのは、そのころです。ちょうど総合的な学習が導入されたはしりの時期で、お互い30代。授業の話をしたのを覚えています。

その後、教育行政畑を歩いて20年余りになりますが、振り返って感じるのは、各管内の文化風土の違いです。例えば、沿岸部と内陸部、基幹産業が漁業の地域と農業の地域では教育や学力に対する親の考え方が違う。市町村の中には、学力を高めるより、子どもが後継者になってくれることを第一に考えるところもありました。道内14ある教育局によっても学校教育に対するアプローチの違いがあると思います。

北海道は広く、各地にさまざまな特色があって全道一律にいかないことが多いのですが、私は「生まれた地域によって格差がついてはならない」、そして「自分の住む地域のよさを理解してもらいたい」の2つを大事に教育行政に取り組んできました。

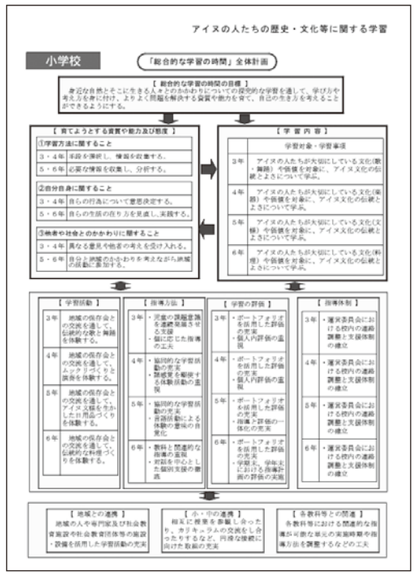
現在、道内の小中学校における地域学習の内容は地元の市町村が中心で、「北海道」という括りで学ぶ時間は限られているようです。具体的にはどのような状況でしょうか。

小学校で言えば、3、4年生の社会科で少しだけ勉強します。例えば、小樽市の場合、同市を学ぶ副読本がありますが、全体で約200ページあるうちで北海道全体に関する記述は10ページ程度。つまり、5%程度ですね。どこの市町村もだいたいこのような分量ではないかと思います。この他に総合的な学習で地域について学ぶ時間を設けている学校はありますが、全般に「北海道」という単位で学ぶところはあまりないでしょう。中学校も同様で、全国一律の学習内容で北海道を学ぶ部分はありますが、特化したかたちで学ぶ時間はないと思います。

dec Interview

なかざわ よしあき 1963年新潟県胎内市生まれ。87年北海道教育大学旭川校卒業（社会科・教育心理専攻）。池田町立池田小学校教諭を皮切りに98年まで十勝・上川管内で教員生活を送り、99年道立教育研究所へ。その後、根室、上川、後志の各教育局などを経て、13年本庁学校教育局義務教育課主幹、16年道立教育研究所企画・研修部長、19年本庁学校教育局義務教育課長を務め、20年より現職（2021年3月取材時）。趣味は旭川の自宅に戻ったときに楽しむ野菜づくり。

一方、道教委では2010年度から「北海道ふるさと教育」の取り組みを始めています。私が本庁にいたときにかかわった事業で、子どもたちが北海道について理解を深め、郷土に対する愛着や誇り、また国際社会で生きる力を育もうという目的で、総合的な学習などで学習内容が検討され、学校での実践が始まりました。これをもとに2016年度以降は「北海道ふるさと教育・観光教育等推進事業」として①アイヌの人たちの歴史と文化等、②北方領土、③観光、の3つを学習テーマに、学習資料や指導プログラムを提供し、毎年、テーマ別に実践校・協力校を決めて教育活動を推進しています。全道の学校に広げていく計画で、2020年度の実践校と協力校は小学校各20校、中学校12校／15校、義務教育学校3校／1校です（＊実践事例の内容は道教委義務教育課のサイトで閲覧可能）。



道教委義務教育課のサイト（上）と、「アイヌの人たちの歴史と文化等」の学習テーマについての全体計画（下）

もう一つ、道教委の取り組みで挙げたいのは、北海道命名150年事業の一つとして2017～18年度に行った北海道版道徳教材「きた・ものがたり」という冊子の作成・配布です。私は教育研究所にいた時期に企画や監修的な作業に携わりました。北海道にゆかりある偉人についてわかりやすく要約して紹介する内容で、小学校高学年用と中学校用をつくり、全道の学校に配布しました（＊道教委義務教育課のサイトで、指導資料とともにダウンロード可能）。道徳の時間や朝の読書の時間などに活用してもらおうというものでした。

掲載する人物は、全道の教育局を通じて各管内の教員から挙げてもらって選びましたが、小学生用は、松浦武四郎、新渡戸稲造、廣井勇、知里幸恵、荻野吟子など16人、中学生用は加賀伝蔵、梨本弥五郎、エドウィン・ダン、竹鶴政孝など16人が掲載されています。できれば、毎年こうした冊子をつくり、全道の子どもたちに浸透していければいいのですが、財政的にそういうわけにいかないのは残念ですね。

北海道版道徳教材「きた・ものがたり」

子どもたちの地域学習の取り組みでは、札幌市で行われている雪学習や交通環境学習があります。地域学習の意義や取り組みの留意点についてお聞かせください。

私の教員としての体験ですが、算数や国語などを苦手とする子が、社会科や総合的な学習の時間で身近な地域について学ぶ授業では、とてもいい顔をしていた、ということが印象に残っています。地域学習の良さはそこにあり、教える側も楽しかったですね。

雪学習については、倶知安は雪の多いところで、この冬も全道でトップを競う積雪量でしたが、札幌のような雪学習は行われていません。「除雪が行き届いているのは当たり前」、と地域の人も子どもたちも受け止めているでしょうが、当たり前のことをもう一度、調べ直して価値を再認識することが、ほっかいどう学の観点からも大事だと思います。

そういう意味で「みち（道）」は、地域学習のとても良いテーマだと思います。そこには歴史や産業などさまざまな視点があり、いろいろなつながりのなかで世の中が成り立っていることを知ることができます。毎日何気なく通っている身近な道路について学習し、その後で修学旅行に出かけるとバスの車窓からの風景の見え方も変わってくるでしょう。単なる知識の習得にとどまらず、子ども自身がいろいろなつながりのなかで生きていること、支えられていることを考えさせるところに「みち」の教育的価値があると思います。

新幹線や高速道路で倶知安の交通環境も変わりつつありますが、こうしたことも教育テーマになり得ると思います。中高生であれば、札幌との時間距離の短縮によって現実に自分に何ができるようになるかを考えたり、提案したりできますね。

私自身、「みち」に関連して強い興味を持ったのは鎖塚（明治期に道路開削のために酷使された囚人労働の史跡）です。マニアックに調べてみたくなるテーマですが、子どもたちに教えるとなると、発達段階に合わせた教材のつくり方が必要です。自分が知っていることを全部教えたくなる、というのはよくあることですが、これではクラスのなかでわずかな児童生徒しかついてこれない。教員にとって調べた内容をいかに削るかが重要ですね。

もう一つ地域学習で留意したいのは、先生はもともと「風の人」で転勤族です。赴任先の地域について知識豊富

ということはないのですから、学ぶ場や学び方をコーディネートするくらいの感じで身軽にやっていくことです。先生が「すべて教えてやろう」というのでなく、子どもたちと一緒に地元の人から学ぶくらいの感覚がいいですね。

児童生徒1人1台端末整備のGIGAスクール構想がコロナ禍の影響で加速しています。課題や可能性について、どう見ていらっしゃいますか。

人口減少が進み、他の県が14個入るという広大な面積の北海道にとってICTの活用は大きな助けになると思っています。後志教育局には10年前にも勤務していますが、この10年の間に約110校あった小中学校は統廃合によって90ほどに減少しました。学校は分散し、少人数化の傾向も進むでしょうから、子ども同士で何かやるというのはますます難しくなっていきます。部活動もしにくい、スポーツなどのチームをつくりにくい、いつも限られた人間関係のなかにいるという状況で、新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」にどう対処するのか、これは大きな課題です。

そのように人との直接的なかかわりが難しくなるなかで、ICTによってオンラインでいろいろなつながりを広げることができ、地域社会だけでなく国際的な交流へと空間軸を広げられることは、子どもたちにとって良いことです。後志の学校でもICTの整備が進んだところから、いろいろな試みが始まっています。例えば、ハワイの天文台とオンラインでつなぎ、小学生を対象にしたライブ授業が行われたり、後志への入植者の出身地である本州の町と子ども同士でオンライン交流したりということがあります。

子どもたちのICTへの適応力は高いですね。紙媒体とデジタル媒体ということで言えば、紙で育った私たちの世代と違って、子どもたちはデジタルでも大丈夫そうです。また、直接、先生と対面的に接するよりもリモートの方が楽だという反応もある。これは子どもばかりでなく、若い先生方の研修の場でも「リモートの方が威圧感がなくていい」という意見が出て驚かされます。

ただ、ICTには必ず光と影があると思います。指導する側はその点に注意が必要で、「紙／PC」、「直接／リモート」のそれぞれのよさを活かしたハイブリッドを目指すべきでしょう。例えば、PCでどんどん一人で学んでいける子がいる一方、そうでない子もいます。直接、声をかけて励ましたり、グループで取り組むなど子どもに合わせた対応が欠かせないと思います。

今年2月の「第4回ほっかいどう学連続セミナー」（2月20日／ニセコ町民センター／主催：NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム）ではパネリストとしてご参加いただいています。ほっかいどう学に期待されることは何でしょうか。

「学校と地域の連携」をはじめ、社会のなかのさまざまな主体の連携やつながりが大切だと言われていますが、それにはつながりを媒介するものが必要です。その媒体になるのがほっかいどう学ではないでしょうか。道民なら誰でも北海道について語ることができます。学校、地域、産業界などさまざまなところに身を置く人が、共通に語れるものを真ん中においてつながる、ということだと思います。そういう意味で、学校にとっても地域や社会とのつながりを深めるために、ほっかいどう学の力を借りることができればありがたいですね。学校の先生は大変多忙で働き方改革が必要な状況ですから、そういう教育活動を専門的な機関にアウトソーシングするということも、今後、国の制度が整えば可能になるかもしれません。

GIGAスクールとの絡みで言えば、子どもたちは端末で検索することで北海道に関する豊富な情報に手軽に接することが可能になりました。ほっかいどう学についても、ゲーム感覚で楽しめるような遊び心のあるコンテンツを期待したいと思います。

ほっかいどう学の意義とは何か。その一つは「多様さを認め合う」ことの大切さを確認できることだと考えています。今はSNSがコミュニケーションの大きな部分を占め、同じ考え方の人同士のつながりは強まっても、異質な意見の人を排除したり、攻撃するようなことも散見されます。多様性が否定されるような危機感を感じるときもあります。しかし、北海道は先住民族であるアイヌの人たちと共に暮らす多様性に富む豊かな大地であり、また、全国各地の人々が入植し、認め合う遺伝子を持っているはずです。それを思い起こし、認識するためにも「北海道」を学ぶ意義は大きい。互いに認め合うことの大切さを、ほっかいどう学を通じて子どもたちにも伝えていけたら素晴らしいと思います。

寄稿

社会資本整備と教育

decが小学校教諭と連携し取り組んでいる社会資本整備の教材化について、今回 は「道路交通と学校教育」をテーマに道内の小学校で実施された授業について、授業を実践された教諭に寄稿いただきました。

札幌雪学習について

札幌市立発寒南小学校 教頭　朝倉　一民 氏

札幌雪学習の広まり

札幌市の雪学習は2000年に北海道教育大学札幌校と北海道教育大学附属札幌小学校での総合的な学習「あいの里雪探検隊」で産声をあげ、その後、北海道教育大学札幌校と道内の教員による「北海道雪プロジェクト」が発足したことで、数々の実践となって札幌市内、北海道内に広まりました。この雪学習の高まりは、2011年に札幌市らしい特色ある学校教育の重点「雪・環境・読書」の一つとして位置づかせることになります。さらに雪学習の実践は「冬のスポーツ」、「冬の自然」だけではなく、除排雪と市民の生活を学ぶ社会的側面についても教材化され、そのことで雪学習は札幌市建設局土木部雪対策室とも共同で教材化を行うこととなり、2015年に雪対策室が事務局となり、市教育委員会職員、小学校教諭、各区土木センター職員、一般社団法人北海道開発技術センターによって構成された「札幌雪学習プロジェクト」が発足しました。

「札幌雪学習プロジェクト」検討会の様子

雪をテーマにした教材開発

「札幌雪学習プロジェクト」ではこの5年間で10を超える授業開発・公開を行い、チームで評価した後に「学習パッケージ」として、指導案や教材等を作成しています。昨年度は、6年生社会科で取り組む「わたしたちの生活と政治」に対応した「大雪と共生する200万都市さっぽろ」の学習テキスト、教師向け指導書を作成しました。本テキストは、「降雪量6mのまち」札幌に、およそ200万の人々が住むことができるようになった背景として札幌市の雪対策、雪を生かす取り組み「雪まつり」を教材化した内容となっており、市民の願いや税金の使われ方を視点として学習が進む構成になっています。また、昨年度から小学校でスタートした新しい学習指導要領にも対応し、SDGsの視点も取り入れました。「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「住み続けられるまちづくり」、「気候変動に具体的な対策を」といった視点で雪国札幌を見つめると「雪冷房」、「雪室」、「除雪オペレーターの減少」、「地球温暖化」など様々な課題が見えてくるようになっています。

「大雪と共生する200万都市さっぽろ」の学習テキスト（左）、教師向け指導書（右）

雪と暮らすおはなし発表会

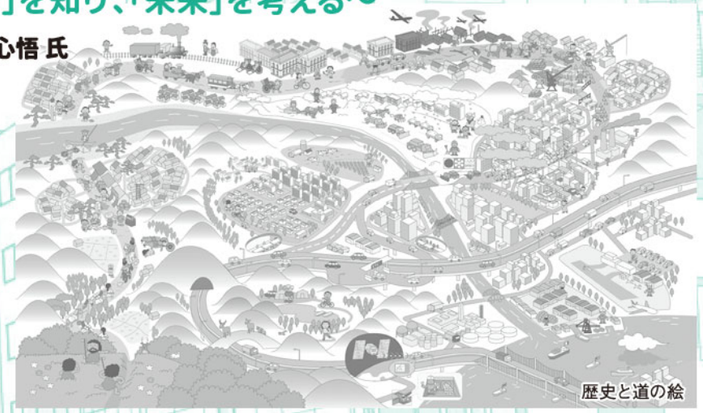
昨年度15回目を迎えた「雪と暮らすおはなし発表会」は2007年に雪対策室と北海道雪プロジェクトで開催したイベントで、サッポロファクトリーアトリウムの巨大スクリーンをつかって子供たちが発表する場として続いています。2012年からは「プレゼンコンテスト」となり多くの小学校が雪の学習の成果を発表してきました。昨年度はコロナ禍のため動画募集となりましたが、動画ならではの表現方法で多くの作品が集まり、受賞作品は「チ・カ・ホ」で公開されました。わたしたちは雪の学習の教材開発だけではなく、学びの成果を表現する場も提供しており、様々な側面で雪を学ぶ子供たちが、自立した札幌人となり、未来のまちづくりを担ってくれることを願っています。

「雪と暮らすおはなし発表会」の様子（上）と受賞作品（右）

「みち学習」の無限の可能性
～「過去」を振り返り、「今」を知り、「未来」を考える～

札幌市立太平南小学校 教諭　似内　心悟 氏

昨年度、みち学習を勉強させていただく機会をいただき、小学校6年生社会科の教材づくりを行いました。「みち」を中心教材にして授業をつくることはこれまでに経験が無かったので、6年生の社会科授業にどのように位置付けるのか試行錯誤の中での実践となりましたが、実践を終えて「みち学習」の無限の可能性を実感することができました。



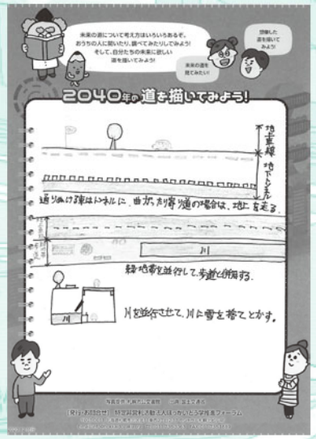
歴史と道の絵

歴史授業を「歴史のみち」で振り返る

「みち学習」の初回会議の時に出会った1枚の絵。それが「歴史と道の絵」でした。この絵を見たときに「この絵を歴史学習の振り返りに生かすことができるのでは？」と考えたのです。そこで6年生の歴史の授業を全て終えた時期での実践を計画しました。「みち学習」の授業は全部で2時間。最初の1時間目を「歴史のみち」で振り返る授業と位置付けました。歴史が大好きなクラスだったので、この絵を提示した時、すぐに子どもたちから反応がありました。「ここは縄文時代を表している！」、「この1枚に日本の歴史が全てつまっているぞ！」絵に表現された「その時代の特徴」を的確に見取り、どの時代であるかを判断していく子どもたちの姿を見て、私も嬉しくなりました。次に「今度は道に視点を置いてこの絵をもう一度見てみよう」と課題を出します。すると「道の材質に注目する子」、「乗り物に注目する子」、「無電柱化に気付く子」が自分の視点で絵と向き合い、対話が始まりました。そして対話を通して「道はずっと歴史とともに進化・発展して今につながっている」ことに気付くことができました。これだけでも歴史の振り返りとして十分に優れた教材ですが、更に優れているのは「この絵の道は未来にもつながっている」、「次は未来の道について考えよう！」と次の時間の発展的な授業につなげることができるところなのです。

札幌の「道の未来」を考えよう！

「みち学習」の授業の2時間目として計画したのが「札幌の道の未来を考えよう！」です。実は子どもたちと「未来のことを語り合う」授業というのはあまりされてこなかった実態があります。私自身もどのような授業になるか期待と不安でいっぱいでした。しかし、授業が始まると心配は無用でした。子どもたちは札幌の道の「今」の問題点（雪・渋滞・事故など）を解決するための子どもらしいアイディアをどんどんと出していったのです。全てをご紹介することは叶いませんが、「車が走る道路を地下にして歩行者は地上の道路を歩く（道の役割の分担化）」、「木や花を植え、自然をしっかりと残した道（環境を守る）」、「雪を溶かすなど冷暖房設備を付けた道（雪対策）」など子どもたちの柔軟な発想は、北海道開発局の方々にも賞賛していただきました。このように、面白くて、無限の可能性がある「未来を語る授業」にこれからも子どもたちと共に挑戦していきたいと思っています。



子どもが描いた2040年の札幌の未来の道

寄稿 社会資本整備と教育

上川管内における除雪授業について

当麻町立当麻小学校（現：旭川市立近文小学校）教諭
松浦　達也 氏

子どもたちは身の周りの社会のことを大人が思っているほど知らない

上川総合局管内はご存知の通り、南北に細長く224.4ｋｍ、面積は10,619㎢で、これは新潟県とほぼ同じ面積です。生活上の移動では、自動車に頼るところも大きい地域であり、加えて管内全域は降雪量が多く、年間降雪量が10mを超える市町村もあります。にもかかわらず、各市町村が作成している社会科副読本（3～4年生が地域を学ぶために使用する副教材）には、冬期間の道路の除雪や雪害対策について記載があるものは決して多くはありません。そこで、過去の札幌市の雪学習の授業記録なども参考にしながら、「上川版除雪授業」を4年生を対象に行うことにしました。

私が勤務していた当麻町は旭川市の東側に位置する町です。旭川市に通勤している世帯も多く、降雪時には除雪の恩恵を大いに受けています。しかしながら、4年生の子どもたちに事前に行ったアンケートでは「誰が除雪をしているのか」、「どのように除雪をしているのか」について知らない子がほとんどでした。加えて、「国道」、「道道」、「町道」の存在も知らない子が大半でした。私たち大人が思っている以上に子どもたちは目の前にある社会資本のことを知らないのです。子どもたちはまず、町道の除雪について学習しました。「10㎝以上の積雪があればすぐに出動」、「朝7時までにはすべての町道の除雪を終えている」などの事実を調べ、自分たちが登校するまでに様々な工夫や努力があったことを子どもたちは学びます。次に、保護者が旭川市に通勤している家庭も多いので、自分の親がどうやって通勤しているのかを地図で確認します。すると、「道道」、「国道」を通っていることがわかります。でも、役場は「町道」しか除雪していないと言う。ここで子どもたちから疑問が生まれます。「じゃあ、それらの道路はどうやって除雪しているの？」。

除雪授業の際の板書

こうやって、冬道の安全を守ってくれているんだね

新潟県に匹敵する面積を有する上川管内、一つの町を除雪するのとは訳が違うと子どもたちもすぐに気付きます。そこで提示したのが、国交省北海道開発局旭川開発建設部が使用している「除雪車機械位置情報システム」です。GPSで除雪車両の位置を確認しながら作業することのよさを考える授業を行いました。また、道路監視カメラや固定式視線誘導柱など様々な方法で雪害から私たちを守っていることもわかりました。公開授業当日は、旭川開発建設部の大西調査官をお招きし、子どもたちの学習に対してより詳しい説明もいただき、普段目にすることができない旭川市の旭橋を手作業で除雪する資料などを見せていただきながら学びを深めることができました。子どもたちの授業後の感想にも、「こんなに苦労して私たちの生活や安全を守ってくれているなんて知らなかった」とありました。今回の私の授業は、「上川みち授業」のまだまだ入口です。旭川開発建設部の皆様からたくさんの資料をいただき、また疑問にも親切に回答をいただいて実施することができました。ありがとうございました。今後も、旭川開発建設部の皆様と協力しながら、より深く「冬道の安全を守る営み」について子どもたちに伝える方法を考えていきたいと思います。

授業後に、開発建設部の大西さんにさらに質問しに行く児童

「遠軽昔・みち物語」囚人道路から未来へ続くみちへ

北見市立中央小学校 教諭　細木　亜由美 氏

オホーツクの歴史は囚人道路から始まった

北海道の開拓は、ほとんどが海から内陸へと進められています。4年生の社会の学習で使う副読本には「湧別浜からうっそうと茂る原生林の中を1日かけて歩き、ようやくこの地にたどり着きました」と書かれています。私は「えっ？未開の地なのに、20kmもの距離を、たった1日で歩いて来られるの？」と不思議に思っていました。実は、北海道の開拓団や屯田兵を入れるために囚人によって道路が作られたということを、一体どれくらいの人が知っているのでしょうか？恥ずかしながら、指導する教師も知らない、埋もれてしまった歴史がたくさんあるのです。

遠軽みち物語 ～過去から未来へ続くみち

私が以前勤務していた遠軽町立東小学校の4年総合的な学習の時間の授業で子どもたちは、「囚人はなぜ道路を作ったの？畑を作ったほうがいいのでは？」とゲストティーチャーの中原氏に質問。そこで初めて、網走監獄の囚人が足に鎖をつけた状態で酷使され、囚人労働史上で最も悲惨な事例があったことを知ります。しかも死者の多くは遠軽の区間で亡くなり、毎夜、死者の声が聞こえてきたことから、国道沿いに慰霊碑が建てられたことを聞き、衝撃をうけます。この近くに2019年、道の駅遠軽森のオホーツクが開業。100年以上過ぎた今も交通の要衝であり、オホーツクの産業・観光・救急搬送に大きく寄与しているところが、不思議なつながりを感じます。

北海道開拓のために次々と監獄が作られ、鎖でつながれながらの重労働が行われた（出展：博物館 網走監獄）

4年生での学習を生かし、5年生の「未来へ続くみち」の学習で、“人々の幸せにつながる道路”について考えていくのです。

自然や景色だけが観光資源ではない～人々のストーリーが新たな観光に

歴史の重要性について、遠軽町が管理・運営をしているウェブサイト「えんがる歴史物語（ストーリー）」では、次のように述べられています。

（前略）地域の観光を考える上でも“歴史”が重要な要素となります。観光客はただ綺麗な景色や施設を観るだけでなく、そこに関わったストーリーを求めています。そのようなストーリーをしっかり整理して発信していくことがこれからの観光振興に求められるものです。

引用：「えんがる歴史物語（ストーリー）」
http：//story.engaru.jp

想像を絶する過酷な強制労働。「罪人なら死んでもかまわない」という、現代では到底許されない非人道的な考え方のもとで驚異的な早さで作られた北海道の道路。重機や測量技術もない中、生い茂る大木・固い岩・密林地帯、川すらも横切り、真っ直ぐに切り拓いた事実は、風化させることなく子どもたちに引き継いでいかなくてはいけません。今後も「オホーツクみち学習」の取り組みを通して、北海道の魅力や地理、歴史、インフラについて存分に教えていけるような授業づくりに励んでいきたいと思っています。

国道333号沿い薬師山ふもとにある「山神の碑」。死後もなお囚人と呼ばれ続けるのは気の毒と考え山の神として刻印